「男、突っ走る！」

第80回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（23）		『オフィスツリーイン』代表
木内　孝志（52）		雅也の母
木内　真保（50）		雅也の母
木内　健次郎（19）		雅也の弟
国枝　佐代子（58）		市民映画プロデューサー
山中　敦夫（43）		劇団主宰者
本村　晴臣（54）		音楽プロデューサー
田所　俊子（62）		市民映画プロデューサー
橋崎　悟（48）		ＷＥＢ会社社長
野倉　浩太（21）		『スリジェネ』メンバー（声）

1　木内家・居間

雅也と真保がカツ丼を食べている。

真保「どういうつもりなんだろう、健」

雅也「今朝は普通に仕事行ったのにね」

真保「まさか辞めるなんて思わないじゃない。私たちに一言の相談もなしに」

雅也「何かあったのかな」

真保「え？」

雅也「だって、せっかく就職できた工場でしょう。そこをいきなり辞めてくるなんて、よくよくのことがあったんじゃないのかな」

真保「何が気に入らなくて……」

雅也「本人に聞いてみるしかないでしょ。夕方にでもなったら、起きてくるだろうから、その時にでも」

真保「父さんにも言わなきゃね」

雅也「どうせ今日も残業で帰り遅いだろうから、俺から言っとくよ」

真保「何て言うの？」

雅也「シンプルに、健が仕事辞めたとしか言

えないでしょ。あと、健から理由を聞いてさ」

真保「まあ、そうか」

雅也「本人にしか分からないこともあるでしょうよ。いくらうちらが、勝手に仕事を辞めたことを咎めたところで、もう辞めちゃったものはどうしようもないんだから」

真保「……」

雅也「とにかく、健が起きたらいろいろ聞いてみよう。話はそれからでしょ」

真保「（食べ終わって）ごちそうさま」

雅也「はいはい」

2　同・雅也の部屋

パソコンで仕事をしている雅也――廊下からドアの開閉音と階段を下りる音が聞こえる。

その音に気が付く雅也。

3　同・居間

雅也が入ってくる――真保と健次郎が待っている。

真保「起きてきたわよ」

健次郎「……」

雅也「何があったんだよ、いきなり仕事辞めるなんて」

健次郎「ムカつく先輩がいてさ、あんなのと一緒に仕事するぐらいなら、辞めたほうが良いと思ったんだよ。それに、あんな暑いところで仕事なんかできるわけないだろ。気がおかしくなりそうだわ」

真保「（呆れて）夏場の工場が暑いのは当然でしょ。私だって、昔は工場勤務だったし、今もパートで工場勤務だけど、そんなこと言ってられないでしょ。そんな理由で、仕事辞めるなんて、どうかしてるわよ」

雅也「辞めて、これからどうするんだよ」

健次郎「そりゃ、仕事見つけるよ」

真保「このご時世に、あんたを雇ってくれるような会社があるわけないでしょ」

健次郎「アルバイトでも何でも、探すよ」
雅也「どういうところ探すんだよ」
健次郎「それは分かんない」
真保「早めに見つけなさいよ」
雅也「でもさ、早く見つけたところで、また合わなくて辞めることだってあるでしょ。慎重に考えてみても良いかもね。それに、製造業はもう辞めたほうが」
真保「製造業がダメなら、他に何ができることがあるって言うのよ」
雅也「それは分からないけどさ、まず製造業の現場はこいつには無理だってことが分かったでしょ。それなら、接客業とか他の業種で見つけるとか」
真保「……」
健次郎「まあ、求人サイトとか見て、探してみるけど、あまりうるさく言わないでくれよな。ちょっとゲームしよ」
と、テレビの前に来てゲームのセッティングをする――呆れ顔の真保と、心

配そうな顔をしている雅也。

4　同・全景（夜）

5　同・居間

雅也がテレビを見ている――玄関のドアの開閉音が聞こえ、孝志が帰宅する。

孝志「ただいま」

雅也「おかえり」

孝志「飯食うか（と支度をする）」

雅也「ねえ」

孝志「どうした？」

雅也「今日、健、昼で帰ってきたの」

孝志「会社早退したのか？」

雅也「辞めてきたんだって」

孝志「は？」

雅也「そういうリアクションになるよね」

孝志「辞めたって、どういうことだよ」

雅也「どういうことも何もないでしょ。辞めたものは辞めたんだから」

孝志「どうしてまた？」
雅也「健の話では、先輩の人とウマが合わなかったんだって」
孝志「そんなこと、仕事するうえじゃいくらでもあることだろ」
雅也「それに、工場が暑いのが耐えられなかったみたいだって」
孝志「工場が暑いの当たり前だろうよ」
雅也「一応、健の中では次の仕事を見つけるつもりではいるみたいだけど、まあ製造業は無理だろうね」
孝志「工場の暑さが嫌なんて、俺や母さんなんかどうなるんだって話じゃないか」
雅也「だから、健にはもう製造業は無理だって言ってるの。今日まで働いてたところは、高校に来た求人の中で、たまたま地元だったからっていう理由で面接受けて採用されたでしょ。業務内容とかそういうのはさておいて、地元だったからっていう理由だけで決めちゃったのが、まずかったのかもね」

孝志「今更そんなこと言ったって……」
雅也「辞めちゃったからさ、ガミガミ今になって健を責めたところでどうしようもないけどさ」
憮然としている孝志。

6　中央公民館・交流コーナー
雅也、佐代子、山中、本村、田所、橋崎がテーブルを囲んで話している。
佐代子「本番まで、あと約一ヶ月となりましたが、今日相談したかったのは、ミュージカルの後の『スリジェネ』の活動内容のことです」
山中「プロを目指すパフォーマンスグループと謡ってる以上は、ステージのように人前に出れる機会があるなら、出たほうが良いと思いますけど」
本村「一番理想的なのは、オファーをもらって出演料ももらえるような企画だけどね」
田所「音楽イベントだったら、この辺りじゃ

いろいろやってるから、歌の上手い子たち
だけ選抜して出演させるのも良いと思うけ
どね」
橋崎「メンバーが、他のオーディションに出
たりする時のバックアップとかも必要だと
思いますが」
佐代子「オーディションに出る場合は、まず
運営で相談をしてもらおうかと思ってます」
雅也「受けてみたいオーディションを、承認
制にするってことですか？」
佐代子「『スリジェネ』のメンバーである以
上は、こちらの活動を優先してもらわない
と。『スリジェネ』の活動に影響が出るよ
うなオーディションを承認するわけにはい
かないでしょう」
雅也「そうですか……」
佐代子「もし、他の団体やグループの演目に
出る場合は、ちゃんと名前の後ろに、カッ
コで『スリジェネ』って入れてもらわない
と」

山中「それについては、一つ確認したいんですけど、『スリジェネ』のメンバーは、事務所のような形で、所属してるっていう認識なんでしょうか。その辺りのことは、ちゃんとメンバーに周知したほうが良いと思います」

佐代子「私の中では、『所属』という扱いにしたいと思ってます。それに、ゆくゆくは追加メンバーを募集することも視野に入れてます」

雅也「二期生メンバーってことですか？」

山中「メンバーを増やすと、その分管理だって大変になるでしょう」

佐代子「グループとして動く以上は、それも覚悟の上です」

本村「さっき、田所さんから歌の選抜の話があったけど、例えばライブハウスとかだと出演料をこちらから払えば、歌を披露することもできるけどね」

佐代子「出演料は、選抜メンバーで割り勘に

すれば問題ないですね。それなら、一人分の負担も減るでしょうし」

本村「そうそう。今回、歌唱稽古してるけど、伸ばせば結構良い感じになりそうな子もいるからね。僕も、せっかくならあの子たちと歌で共演してみたいしね」

田所「ステージってわけじゃないけど、市民演劇祭とかならどうかな。毎年二月上旬にやってるけど」

山中「うちの劇団、今年度のやつに出演する計画を立ててます」

佐代子「演劇祭か……。確かに、地元の団体や学校も参加するから、知名度をアップしたりメンバー募集するには良い機会かもしれない」

橋崎「でも演目はどうするんですか？　山中さんは自分の劇団のほうで手一杯でしょうし」

佐代子「いるじゃありませんか。作品を作れる人が（と雅也を見る）」

雅也「（気づいて）え……僕ですか？」
橋崎「そっか。うっちーは、脚本書けるもんね」
雅也「でも、僕はドラマとか映像の脚本は書いたことありますけど、舞台の脚本はまだ書いたことありませんし」
山中「演出は、やったことない？」
雅也「もちろんです。文章でいろいろ書くことはできても、それを役者に指示して、ああしろこうしろなんて、やったことないですよ」
山中「経験値積むために、やってみるのも良いんじゃないかな」
雅也「え……？」
山中「うっちーの初演出だったら、他のメンバーは見守るつもりで頑張ろうって気になって、参加してくれるんじゃないかな」
雅也「どうですかね……」
田所「もし、演劇祭に参加するなら、早い方が良いよ。参加団体の数によっては、早く

申し込み締め切る可能性もあるから」
雅也「分かりました。一度、市民演劇祭のことは僕も調べてみます」
佐代子「せっかくの機会だから、私はぜひやってみた方が良いと思うけど」
雅也「……」

7　同・ラウンジ

自販機のジュースを買いながら話している雅也と橋崎。

雅也「これから、どうしたら良いんでしょうね」
橋崎「『スリジェネ』は、もう『ぷれいす』とは引き離すつもりなのかな、国枝さんは」
雅也「まあ、今のところ『ぷれいす』の発行予定はもうなさそうですしね」
橋崎「国枝さん、あれもこれもってかんがえるのは良いけど、メンバーの了承を得るために、同意書とかちゃんと書類上の誓約を交わさないと、後々面倒なことになると思

うけどね」

雅也「同意書？」

橋崎「演劇経験者の人からしたら、参加したいオーディションがあるのに、こっちの活動優先って言われて、何もできないなんて、それはそれで可哀想じゃん」

雅也「まあ、確かに……」

橋崎「所属ってさ、ある意味では活動を制限することにもなりかねないでしょ。そうなったら、反感を食らったり、運営への不信感を抱くことにもなる。こういうことは、はじめのうちに約束事として固めておかないと、後になって言った言わないのトラブルにもなるし、後だしじゃんけんみたいに、後から決定事項を言われても、メンバーたちは納得しないでしょ。そのためには、あらかじめ『スリジェネ』の規約やルールをちゃんと作って、それに納得をしたうえで同意書を提出してもらう。ちょっと面倒で硬いかもしれないけど、こういうことはち

やんとしておいたほうが良いんだよ」
雅也「なるほど……」
橋崎「うっちーはまだ若いから、そういうリスクのこととかはまだ分からないかもしれないけど、誓約書や同意書の力って大きいんだよ。だから、所属のこともオーディション参加の事前相談のことも、ちゃんと書面にして同意書を提出してもらったほうが良いと思うんだよ」
雅也「その同意書が嫌で、抜けちゃうメンバーも出てこないとも言えないですよね」
橋崎「そうだね。でも、それがメンバーの答えでしょう。思ってたものと違うとか、どこか特定の場所に所属するんじゃなくて、フリーで自由にやりたい子だっているだろうし」
雅也「特に経験者は、そう思うでしょうね」
橋崎「それともう一つ気がかりなのは、国枝さんがどこまで責任を持つかってことだよ」
雅也「責任……ですか？」

橋崎「国枝さんは、総合プロデューサーとしてあれをしたい、これをしたいって企画を提案するかもしれないけど、企画だけじゃなくて全体の責任を背負うことがプロデューサーの役割でしょ。企画案だけ出して、後は担当の人に任せますって丸投げしたら、それはプロデューサーじゃなくて、ただの企画者さんじゃん。そりゃ、国枝さんの行動力や地元での人脈やアイディアはすごいと思うけど、プロデューサーとして、若いメンバーたちを預かってる以上は、この『スリジェネ』で何か起きたときの責任を負う覚悟も持たないといけないんだよ。ライブハウスの企画だって、演劇祭への出場だって、このままだとハルさんやうっちーに丸投げすることになるよ。自分は特に何もしないのに、言うタイミングになったら言うことだけは言うって、それじゃ外野のヤジと同じようなものじゃん。それじゃあ、うっちーだってやりにくいでしょ」

雅也「……」

橋崎「別に責任転嫁とか、そういうことじゃないんだよ。ただ、やるからには責任を背負うことが大事だってこと」

雅也「……」

橋崎「一度、メンバーの誰かに相談してみたらどうかな？　うっちーだと、どうしても運営の気持ちも入っちゃうだろうから」

雅也「そうですね……。ちょっと、メンバーに聞いてみます」

8　木内家・全景（夜）

9　同・居間

台所で食器洗いをしている真保――スマホで求人サイトを見ている健次郎。

健次郎「何かないかな、求人」

真保「簡単に見つかったら、苦労しないでしょ」

健次郎「接客業かなぁ」

真保「できるの？」
健次郎「どうかな？　まあ、バイトでやってみて、合うか合わないか実感して、合わなかったらまた変えれば良いよ」
真保「コロコロ変えないでよ」
健次郎「分かんないよ、やってみないと、自分でも」
呆れ顔で見ている真保。

10　同・雅也の部屋
雅也がスマホで浩太と話している。
雅也「そうなの。まだ確定じゃないし、これからどうなるか分からないんだけど、運営側にいると、どうしてもそっちサイドの考えに偏っちゃうでしょ。いずれ、正式なことは国枝さんから話があるとは思うけど、この話、コウタはどう思う？」
浩太の声「まあ、グループって言ってる以上は、劇団みたいな感じになるとは思ってたけど、まあオーディションの参加の承認は、

ちょっとやりすぎな気がするけどな」
雅也「かえって、みんなの行動を制限させちゃうような気がするんだよね……。所属だから、国枝さんの中ではメンバーの管理をしたいと思ってるんだろうけど。でもさ、そんなことしたら、メンバーが離れていくんじゃないかって思うんだよね。あくまで俺たちは『スリジェネ』のメンバーだから、そのことを自覚したうえで動いてほしいって、国枝さんは思ってるんじゃないかな」
浩太の声「いちいち言わないといけないのかな。別に黙っててもいいんじゃない？」
雅也「黙ってるって、そんなことして、後になって気づいたら、余計に面倒なことになるんじゃないかな」
浩太の声「バレたらその時だよ。どうして言わなかったのかって言われたら、オーディションの制限までされたくないからって正直に話せばいいんだよ。所属扱いだから、国枝さんは俺たちを自分のテリトリーの中

に入れて、自分の思うがままにしたいだけなんだから」

雅也「そうなの？」

浩太の声「うっちーは、現場で仕切る国枝さんのことを、まだそこまで見てないから分からないだろうけど、結構ワンマンで口が達者なんだよ。当時の市民映画の時だって、脚本や演出のやり方で納得いかないところがあって、自分で脚本書いたシーンもあったんだから」

雅也「それは初耳だわ」

浩太の声「プロデューサーなのに、作品の演出のところまで口を出しちゃって、監督とも折が合わないときがあったんだよ。だから今回もヤマさんの演出に、いろいろ言ってくるんじゃないかって思ってる」

雅也「確かに、ヤマさんからそういう話は聞いてるわ。シーンによっては、間延びしてるからカットできないかって」

浩太の声「だろ。結局そういうことになるん

だよ」

雅也「そっか……。じゃあ俺も、もし演出するようなことがあったら、国枝さんに横から言われるのかな。それはそれで、ちょっとやりづらいわ」

浩太の声「うっちーの立場も難しいところにいるよな。まあ、今はそんなことより、牛のことだけを考えなよ」

雅也「（苦笑して）そうだね。ごめんね、こんなことで連絡しちゃって。うん、じゃあまた今週末の稽古で。はいはい、じゃあお休み（と電話を切る）」

溜息をつきながら険しい顔している雅也。

つづく